

重度障害者が公的制度に基づき、24 時間体制の在宅介護を実現した事例集「支援を得てわたしらしく生きる！ 24 時間ヘルパー介護を実現させる障害者・難病者・弁護士たち」(山吹書店)が出版された。

事故で両手足がまひした女性、人工呼吸器を使う筋ジストロフィーの男性ら 10 人が登場、財政負担

を避けるため介護時間を短くしたい自治体に対し、各地の弁護士やヘルパーがねばり強く交渉し、必要な介護時間を確保した過程がわかる。

「介護保障を考える弁護士と障害者の会全国ネット」編、2,000 円（税別）。

（読売新聞・東京 2016 年 10 月 3 日）

## 書評

有賀悦子・田中 栄・緒方直史（監修）岩瀬 哲・河野博隆・篠田裕介（編）  
運動器マネジメントが患者の生活を変える！—がんの骨転移ナビ  
土屋弘行（金沢大学大学院医学系研究科整形外科学）

ひとは亡くなるとき、何を思うのだろうか？ 走馬灯のように頭を駆け抜ける自分の人生を振り返りながら、幸せな人生だったかどうかといったことを思うのだろうか？ 人生、若いときの幸せよりも、亡くなる間に幸せを感じられるかどうかで、自分の人生に対する満足度は、大きく異なるのかもしれない。

がん患者の人生最期の数か月が、絶望と苦痛に満ちてしまえば、せっかく過ごしてきた人生の日々も、虚しいものになってしまう。そして、ひとがよりよく生き、最期のときを迎えるためには、自分の手で食事をとり、自分の好きなときに、自分の好きな所へ、自分の力で歩いて行けることは、ひとがひととしての尊厳を保ちながら死に向き合うための、重要なエレメントである。今や、がん患者においては、除痛あるいはスピリチュアルケアとしての緩和的アプローチのみならず、その運動機能を維持し、ADLあるいはQOLをその最期のときまで保ち続け、がん患者の「よりよく生きる」という希望をかなえることが重要となっている。

今日わが国では、2 人に 1 人ががんを患っている。そのような中、がんに対する集学的治療法の向上により、多くのがんで生存期間が延長しているが、一方で、骨転移を有するがん患者数は増加の一途をたどっている。がんの骨転移は、がん患者の運動機能を著しく低下させる原因にもかかわらず、これまで

末期と単純に捉えられ、その対処法は、主治医の経験に基づき決定されることがほとんどで、実に千差万別であった。近年ではこれらの現状を改善するため、多くの施設でがん骨転移カンサーボードが立ち上げられ、より質の高い運動器マネジメントを行うために、多職種によるチームアプローチが行われている。本書執筆陣は、その黎明期から第一線に立ち続け、精力的にがん骨転移に取り組んできたエキスパートたちばかりである。

本書では、がん骨転移に対する投薬や手術法のみならず、看護、リハビリテーション、装具、栄養管理、在宅支援など、さまざまな方面からのマネジメント法がわかりやすく解説されており、最新の知識をより実践的に習得することができる。本書を手にしていただくことで、がん骨転移カンサーボードのメンバーが、どのような知識を持ち、何を考え、どのようにがん骨転移患者と向き合っているか、その息遣いまでも感じていただくことができるだろう。それはまるで、皆さんのがん骨転移マネジメントに、頼もしい骨転移カンサーボードのメンバーたちが加わったがごときである。

ぜひ、医師のみならず、がん骨転移マネジメントに携わる全てのメディカルスタッフに読んでいただきたい秀書である。

（B5 頁 312 2016 年 定価：本体 3,800 円 + 税 [ISBN978-4-260-02546-1] 医学書院刊）